

## 美しい私たちの日本語

尾鷲市立輪内中学校3年

藤井 春奈

「私は日本語が大好きだ。」

なんて友達に言うと、「なんで？」「どこが？」と困惑されることが多々ある。それでも私は日本語が好きだ。美しい日本語を口にした時の、あの何とも言えない、流れる音と響きが好きで好きでしょうがない。新しい言葉と出会った時の胸の高鳴りが好きだ。これが毎日毎日味わえるなんて、本当に、日本に生まれて良かったと思う。

なぜ、私がこんなことを「中学生のメッセージ」として伝えようとしているのか。理由はひとつだ。特に若い人の間で、日本語が簡略化されている、と感じるからだ。嬉しい、悲しい、驚いた、から、「ヤバイ」。相槌はとりあえず「それな!」。確かにとても便利な言葉だと思う。今、どんな気持ちなのか、文章にするのに手間がかかると思ったら、「ヤバイ」と言っておけばなんとなく伝わるものだ。また、「それな」と相槌を打ってもらえたら、共感されたと思って嬉しくなる。ただ、私が思うのは、それだけでは少し寂しくはないか、ということだ。みんながそうやって同じような言葉を使うようになったら、良き日本語が失われていくのではないか。それはなんとも悲しい事態だ。では、どうしたら言葉を守っていけるのか、考えてみた。

まず、一番簡単にできることは、自分の話す言葉に注意を向けてみることだと思う。そして、自分の伝えたいことを、言葉に乗せて伝えられているか、確かめてみるのだ。例えば、始めに挙げた「ヤバイ」という言葉。それを、「何があって、どう思ったのか。」という文章に置き換えてみるのはどうだろうか。小説の結末に驚いたのなら、「この小説、ラストがヤバかった。」ではなく、「この小説は、ラストの展開が驚きだった。」という風にだ。二つ目の文では特段難しい言葉を使っているわけではないが、一つ目より自分の心情が伝わりやすい。このように、日本語を丁寧に使うことで、自分の心の状態を自分の言葉で表現する面白さが味わえるようになると思う。最初は面倒に感じるかもしれない。でも、慣れれば案外楽しいものだ。言葉のレパートリーが増えていって、自分の思いをぴったりの言葉で表せると、日本語がさらに面白く感じられるようになる。何かと便利な言葉も良いが、せっかくなら日本語を自由に組み合わせて、自分だけの響きを持った言葉を作り出してはどうか。それが相手に、自分の思った通りに伝わっても、思いもよらない伝わり方をしても、どちらでも良いのだと思う。そんな経験を何度もしなければ、だんだん自分の伝えたい微妙なニュアンスの違いを、言葉に映し出せるようになるだろう。私も今、その練習をしている最中だ。年を重ねても、きっと自分の気持ちを完璧に言葉に表すことはできないのだと思う。自分の心の中は自分でもよく分からないのだから、それは当たり前だ。しかし、私はその経験こそが大切だと考える。便利な言葉だけで済ませようとするのではなく、自分の言葉で表そうとすることが、日本の言葉を守っていくための第一歩だと思う。

言葉には魂がある。美しい言葉は、ひとを温かい気持ちにさせる。ときには、感動の涙を流させる。醜い言葉はひとを傷つけ、苦しめる。ときには、悲しみの涙を流させる。私たちが誇るべき文化である日本語を、私たちの手で守り、広げていくため、今一度、言葉の持つ力を見つめ直すべきではないか。美しい日本語の未来のために。